

秋庭 俊

論文内容の要旨

本研究は術後疼痛対策として、長時間作用性局所麻酔薬であるレボブピバカインを用いた下顎孔伝達麻酔の有用性について比較検討したものである。対象は、G. B. Winter の分類で Class II, Position B の ASA 分類 I 度の患者 30 名である。抜歯に際しては 1/80,000 アドレナリン添加 2% リドカイン塩酸塩 3.0ml を用いて浸潤麻酔を行った。手術終了直後、I 群 0.25% レボブピバカイン (10 名)、II 群 0.25% ブピバカイン (10 名)、III 群 1/80,000 アドレナリン添加 2% リドカイン塩酸塩 (10 名) を 2ml 使用し、下顎孔伝達麻酔を行った。術後痛の評価には、VAS によるペインスコア、手術終了後から疼痛が発現するまでの時間 (疼痛発現時間)、手術終了後から鎮痛薬を服用するまでの時間 (鎮痛薬服用時間)、および術後鎮痛薬を服用した回数 (鎮痛薬服用回数) を用いた。VAS の計測は手術終了直後、30 分、60 分、90 分、120 分、180 分、240 分、300 分および 360 分後の時点において施行した。結果は以下のとおりである。

1. VAS による術後痛の評価において、経時的群内比較では、I 群では手術終了直後と比較し、手術終了 120 分以後に VAS 値の有意な上昇を認めた。III 群では手術終了直後と比較し、手術終了 90 分以後に、VAS 値の有意な上昇を認めた。
2. 疼痛発現時間の群間比較では、I 群が最も長く、I 群と III 群および II 群と III 群の間に有意差を認めた。
3. 鎮痛薬服用時間の群間比較では、I 群が最も長く、I 群と III 群の間に有意差を認めた。

以上より、レボブピバカインは術後疼痛制御を目的とした下顎孔伝達麻酔に用いる麻酔薬として有用であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、術後疼痛対策として長時間作用性局所麻酔薬であるレボブピバカインを用いた下顎孔伝達麻酔の有用性について比較検討したものである。その結果、レボブピバカインは術後疼痛制御を目的とした下顎孔伝達麻酔に用いる麻酔薬として有用であると考えられた。本研究は、下顎埋伏智歯抜去術の術後疼痛緩和の新たな選択肢となり得る知見を呈示している。

以上は、歯学に寄与するところが大きく、博士 (歯学) の学位に値するものと審査する。

主査 土持 眞

副査 影山 幾男

副査 葛城 啓彰